

青山光二

筒文化

阿川弘之

少年の理由なき
殺人と文学

秋山駿

春先の森の企て

荒川じんへい

ぼくのめがね

荒川洋治

水木大先生

荒俣宏

古希

泡坂妻夫

地球の上に朝がくる

池内紀

音楽会のヒストル

池澤夏樹

兄やんの桜

石牟礼道子

給地裏に消えた背中

伊集院静

野口英世の青春

発見

井出孫六

大河内昭爾
チャップリンのNGテイク
大野裕之
フランス語と私
小川国夫
文士と大学
桶谷秀昭
焼干しが決め手
長部日出雄
白秋の住んでいた家
加藤幸子
正月の山国
金子兜太
町内十番以内
川上弘美
現実との距離
岸本加世子
茂吉の体臭
北杜夫
「流される」という
ことについて
木下順二
覗き見の効用
黒井千次
鶴見俊輔詩集
「もろろくの香」のこと
黒川創

玄侑宗久

雨の日と月曜日と
不吉な声

小池昌代

保昌正夫死す

紅野敏郎

なぞがとけると思うな

小林恭二

変化する言葉
EGサイデンステッカー

阪田寛夫

信時さんと唱歌

消えていく夏

佐藤愛子

ビジネス王ストーリーズ

佐藤良知

そら・み・み

澤地久枝

かたち

篠田桃紅

尾崎秀実あるいは
白川次郎について

篠田正浩

はまゆうのはなし

庄野潤二

螢の夜

瀬戸内寂聴

高井有一

時過ぎゆくままに

高樹のぶ子

ニセモノ文化の諸相

高田宏

物言わぬ者たちからの
伝言

竹田津実

私の「夏の花」

竹西寛子

人がましくなる

田辺聖子

DDTの「笑い話」

津島佑子

戸川秋骨の
エッセイについて

坪内祐二

桜子

出久根達郎

ある酒場

常盤新平

人間五十年の究まり

富岡多恵子

デブと帝国

中西輝政

十八歳の自分に逢う
中野孝次

ベスト・エッセイ2004

犬のため息

日本文藝家協会編

編纂委員＝高田宏／津島佑子／増田みす子／三浦哲郎／三木

光村図書



ベスト・エッセイ2004

犬のため息

日本文藝家協会編

編集委員＝高田宏／津島佑子／増田みず子／三浦哲郎／三木卓




光村図書



犬のため息

二〇〇四年六月三十日 第一刷発行

編者——日本文藝家協会

発行者——常田 寛

発行所——光村図書出版株式会社

東京都品川区上大崎二一九

郵便番号一四一・八六七五

電話〇三・三四九三・二一一（代）

印刷所——株式会社加藤文明社

製本所——株式会社難波製本

©Nippon Bungeika Kyokai 2004 Printed in Japan

ISBN4-89528-249-X C0095

価格はカバー・帯に表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は禁じられています。

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません。

ベスト・エッセイ2004
犬のため息

目次

愛にこだわる

青山光二 10

兄やんの桜

石牟礼道子 13

雨の日と月曜日と不吉な声

小池昌代 19

ある酒場

常盤新平 23

異常に対する反応

なだいなだ 29

犬のため息

三浦哲郎 34

欧州最南端にて

村上龍 37

尾崎秀実あるいは白川次郎について

篠田正浩 41

おとりさまの思い出

松浦寿輝 48

お墓さがし

吉行和子 53

音楽会のピストル

池澤夏樹 57

開府四百年の味覚

大河内昭爾 62

かたち

篠田桃紅 71

消えていく夏

佐藤愛子

76

旧友

高井有一

81

愚行坊主

吉村萬壺

86

原稿用紙の余命

村松友視

91

現実との距離

岸本加世子

93

古希

泡坂妻夫

98

去年の枝折こそしをり

前登志夫

104

コマクサ

南木佳士

107

サイゴン時代の日野啓三さん

林雄一郎

111

桜子

出久根達郎

118

十八歳の自分に逢う

中野孝次

121

正月の山国

金子兜太

129

少年の理由なき殺人と文学

秋山駿

134

そ・ら・み・み

澤地久枝

139

僧侶が長生きするワケ

玄侑宗久

143

筍文化

阿川弘之

149

地球の上に朝がくる

池内紀

154

チャップリンのNGテイク

大野裕之

158

町内十番以内

川上弘美

164

チヨムスキーの「楽観」の基礎

吉岡忍

168

終すまかの栖

松山巖

173

鶴見俊輔詩集『もうろくの春』のこと

黒川創

177

DDTの「笑い話」

津島佑子

184

デブと帝国

中西輝政

190

冬至過ぎて落日を慕う

古井由吉

195

動物たちの自意識

日高敏隆

199

遠ざかってゆく声

吉田直哉

205

戸川秋骨のエッセイについて

坪内祐三

209

時過ぎゆくままに

高樹のぶ子

218

時計台はどこですか

山本一力

223

酉の市と一葉祭

増田みず子

230

「流される」ということについて

木下順二

234

なぞがとけると思うな

小林恭二

239

ニセモノ文化の諸相

高田 宏

243

ニューヨークのカラオケ

服部公一

250

人間五十年の究まり

富岡多恵子

254

野口英世の青春——未発表書簡を読んで

井出孫六

256

視き見の効用

黒井千次

265

信時さんと唱歌

阪田寛夫

271

白秋の住んでいた家

加藤幸子

277

発見

海老沢泰久

283

はまゆうのはなし

庄野潤三

287

春先の森の企て

荒川じんぺい

292

光る竹

望月通陽

296

ビジネス王 ストーリーズ

佐藤良明

299

人がましくなる

田辺聖子

304

フランス語と私

小川国夫

314

文士劇の黒子として

半藤一利

319

文士と大学

桶谷秀昭

326

変化する言葉

E・G・サイデンスレッカー

335

暴力の仕組みを解き明かすこと

西山明

341

ぼくのめがね

荒川洋治

347

保昌正夫死す

紅野敏郎

349

蛍の夜

瀬戸内寂聴

354

三浦半島のヤマザクラ

三木卓

358

水木大先生おお

荒俣宏

361

茂吉の体臭

北杜夫

365

物言わぬ者たちからの伝言

竹田津実

369

紅葉ともものあはれ

藤原正彦

374

焼干しやきほが決め手

長部日出雄

379

「雪たたき」余談

眞鍋呉夫

382

路地裏に消えた背中

伊集院静

387

六本木ヒルズでの感想

丸谷才一

391

私の「夏の花」

竹西寛子

396

装幀 三村 淳

協力 豆しば犬キヨ

ベスト・エッセイ2004
犬のため息

愛にこだわる

青山光二

墓詣りが好きだ。ほかに道楽がないから墓詣りをするのかも知れないのだが、神戸・鶴ひよどり越ごえにある先祖の墓に、毎年一度か二度は出かけて行く。三年ばかり前、妻と二人で出かけたことがある。新神戸駅から港に近いホテルへ向かうタクシーの中で、

「お墓詣りでっか」と運転手が云った。「お年を召した方が、夫婦おそろいで旅行しはるのを、こうやってお送りするのが、いちばん嬉しおます」

「そういうもんかね」

「ほんまだっせ！ ご夫婦ともお元気で、こんなお仕合わせなこと、おまへんで」

運転手さんに幸福の判口を押された私たち夫婦が、二人そろって旅をしたのは、しかし、

そのときが最後だった。アルツハイマー型痴呆症の症状がにわかにも重度を増して、家庭での介護が不可能の状態になった妻が、それから間もなく「老健」（老人保健施設）のご厄介になる身となったからである。

最後の旅は墓詣りのハシゴで、神戸へ着く前に紀州へ寄った。新幹線を名古屋で紀勢本線に乗換え、熊野市駅で降りて、一軒だけあるホテルに一泊、そこから三あたしか駅目の新鹿にある妻の生家の先祖代々之墓に詣でた。熊野灘に面した小さなホテルに泊るのが、墓詣りに負けないくらい楽しみだった。

ホテルも旅館もない新鹿の海岸にある墓地の一廓に、三カ所ばかりに離れて在った妻の生家の関係の墓を掘り返して一つの墓にまとめ、新たに「——家之墓」という墓石を業者依頼して建てたのは私である。墓地の管理者に当る寺の諒解をもとめる仕事も石屋の主人が引きうけてくれた。

生活に余裕があるわけでもないのに、いわば余計なそんな事を、しかしつまりはしたくてするのは、私が女房に惚れているからだだった。

私はいま九十歳だが、六十年以上も前に出会って、惚れて、口説きおとして結婚した妻

のことを、いまだに平気で、愛しているなんぞと云うのは、不思議でもあり、少しおかしいんじゃないかと、最近私が書いた『吾妹子哀し』という小説を読んで、云う人が少ない様子だが、私に云わせると、不思議だとかおかしいとか云う人の方がズレているのであつて、すぐ冷めるような恋愛は恋でもなければ愛でもない。前世紀の生き残りの戯言だと思つて聴いていただきたい。恋とは、目を閉じればその人の面影がマナカイに及び、心が疼くばかりか、その人のためにわが命を捧げることさえ、どうかすると覚悟するほどの心情ではなからうか。恋愛が必ずしも結婚における必須の前提条件だとは限らないのは云うまでもないが、それにしても、好きになつて結婚したと思つたら、十年と経たずに別れる例が少なくないというのが、若しかして当今の実情だとすれば、これはやはり困る。

人がそれぞれ人を真実に愛して生きることこそ珍しくない時代が、この辺でもう一度到来しないのかと、夢のようなことを私は希つてやまない。

兄やんの桜

石牟礼道子

港へゆく道の両側に、家がほつほつ向き合っただけの町だったが、車馬の往来も結構あった。中でも活動大写真の赤い幟のぼりをかついだヒロム兄やんがゆく時、この通りは精彩をばなつた。

「皆さあん皆さん、栄楽座の活動大写真の始まりい、始まりい。外題は『目玉の松ちゃん
の忠臣蔵、忠臣蔵』。見逃せば一生の損でござすぞ、一生の損」

陽気がよいと、ズンタッタ、ズンタッタと前奏めいた声が出た。調子外れだが「天然の美」の節のようであった。幟を担ぐ背中がふくれているので、心ないこという者もいた。

「派手じゃねえ兄やん。背中の大黒袋にゃあ、どのくらい貯まっとるかね」

兄やんの片方しか開かぬ目が上下でんぐり返る。

「背中の袋ちなあ、百万両はあろうかな。自分じゃ数えられん。あんた数えなはりよ」

いうなり大きな兄やんが首うつむけ、ぬっと垢まみれの衿足をさし出した。相手は飛び退って手を振り、口をぱくぱくさせていたという。

ヒロム兄やんの「美しき天然」を大人たちまで気にかけていたのは、あんまり調子外れで、鍛冶屋や馬の蹄鉄屋の手元が狂うからであった。春の八幡さまに必ずサーカスがやってきて、この曲をトランペットで流したので、町内の皆はどんな節だか知っている。外れた、と思うと鍛冶屋のトンテンカンが狂う、というのである。焼酎の飲み過ぎだという者もいたが、男の子たちが後ろについて道化の身ぶりで首をくねくねさせてゆくのは、格好の調子だったにちがいない。

蹄鉄屋の方は少しちがった。それが聞えると馬が蹄を上げるのを嫌がり、地面をもじもじこさぎ始めるといのである。蹄鉄屋は落ちつかなかった。それで兄やんに申し入れた。「お主ぬしの商売にケチつけるがためという訳じゃなか。馬どもがな、聴きなれん節じゃもんで、やたら地面ばこさぐもんでのう。どうも蹄の鉄の打ちにくか。俺の手までふるえるが、あ